
戦場のヴァルキュリア ～ブルールの丘から～

watershed

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場のヴァルキュリア 〜ブルールの丘から〜

【Nコード】

N9429X

【作者名】

watershed

【あらすじ】

国境の街ブルールに向かうガリア義勇軍。

故郷の奪還を目指すギンター少尉率いる第7小隊と共に、同じブルールを故郷とする古参の指揮官が率いる義勇軍第4小隊がいた。待ち構える帝国軍防衛部隊との激しい攻防戦をくぐり抜け、彼らは故郷を取り戻せるのか――

今作にはオリジナル要素があります。

プロローグ（前書き）

元教師の古参兵のエピソード。

舞台はブルール奪還戦、第7小隊との共闘作戦という設定に。

主人公はプライベート・ライアンのミラー大尉がモチーフ。

アリシアがいた孤児院の先生（保父？）という架空設定にしてみました。

登場キャラもほとんどオリジナル（皆サッカー選手の名前）。

第7小隊の面々も登場予定・・・

プロローグ

9月になったとはいえ、昼間ともなれば真夏かと見紛う陽射しが照りつけてくる。丘陵地帯に吹く風が、兵士たちにしばしの涼を与えている。なだらかな丘を染める鮮やかな緑と、延々と続く空の青が視界を埋め尽くしている。

丘を抜ける風が朝露に濡れた草を揺らし、牧歌的な景色に素朴な音を加えているはずなのだが、低く唸る戦車の駆動音がそれら一切を掻き消して、兵士たちを「現実」につなぎとめていた。

彼らの「現実」とは、戦争である。

このガリアの地が戦火に飲まれてから半年が過ぎようとしていた。

征歴1935年3月15日、ヴィルトウールの故郷ブルールの街はガリアへ侵攻を開始した帝国軍の奇襲を受け、半日と経たずして彼らの手に落ちた。ヴィルトウールは街の自警団のひとりとして抵抗を試みるも、完全武装の帝国軍に蹂躪される故郷を目の前にして、為す術なく街を後にするしかなかった。

40歳を過ぎるヴィルトウールは、戦前ブルールにある孤児院で身寄りのない子供たちと暮らしていた。彼は元は教師であった。同じく教師で同僚のルーズという女性と出会い間もなく結婚したのだが、数年後に第一次ヨーロッパ大戦が勃発。ヴィルトウールも招集を受けて従軍した。

終戦後、ブルールに帰還するも、ほどなくしてルーズは病に倒れこの世を去ってしまう。ルーズの死後、ヴィルトウールはブルー

ルにただひとつある孤児院で働くようになる。その孤児院はルイズの父が開いたものであり、生前のルイズも子供たちの母親代わりとして過ごした場所でもあった。

ルイズとの間に子供を授かることはなかったが、エリックは孤児院で暮らす子供たちをわが子のように想いながら、義父とともに孤児院を守ってきた。

開戦がいよいよ近いという情勢になり、孤児院を閉鎖し義父と子供たちを首都ランドグリーズへと疎開させていたのだが、ヴィルトゥールは自警団として街に残り、防衛の任に当たっていたのだった。

ヴィルトゥールがブルールを追われて以降、戦況はガリアの敗色が濃厚となっていく。帝国軍は、戦車を中核とした機甲師団による火力と機動力を駆使し、電撃的にガリア領内に侵攻。わずか1ヶ月も立たないうちに首都ランドグリーズの眼前にあるヴァーゼルにまで至る。

首都陥落も想定される事態に陥るが、ランドグリーズへの街道が通る最重要拠点、ヴァーゼル橋の奪還を機にガリア軍が反攻に転じることになる。

そのヴァーゼル橋奪還作戦の先鋒となったのが、ガリア義勇軍第3中隊隷下の第7小隊であった。その第7小隊を指揮したのが、先の大戦でガリアの英雄となったベルゲン・ギンター將軍の息子であるウェルキン・ギンター少尉だった。

若干22歳のギンター少尉は、対岸の敵陣地へ戦車で潜水渡河し奇襲をかけるという作戦を立案。小隊を率いての初陣であったが、これを見事成功に導く。

英雄の息子である青年将校率いる小隊が公国の窮地を救ったことで、一躍彼の名と義勇軍第7小隊の存在はガリア軍内に轟き、反攻の旗印となっていた。

その後も義勇軍第7小隊は、南部クロードンの帝国軍補給基地攻撃作戦、工業都市ファウゼン攻略作戦、マルベリー海岸制圧作戦と、立て続けに勝利を呼びこむ働きを見せ、ガリア軍はいよいよ領内の帝国軍を駆逐しようという局面に転じるに至った。

今回、ヴィルトゥール率いる義勇軍第3中隊隷下の第4小隊は、ギユンター少尉率いる第7小隊とともにブルール奪還戦の戦力として投入され、今まさに街を目指して進軍を続けているのであった。

これから取り戻そうとしている故郷ブルールを去ったあの日、ヴィルトゥールはギユンター少尉に出会った。

ギユンター少尉は、ヴィルトゥールと同じブルールの出身だった。ギユンター少尉は義理の妹であるイサラ・ギユンターと、かつてルイズやヴィルトゥールの下、孤児院で育ったアリシア・メルキオットという少女とともに、故ギユンター将軍がかつて駆っていた戦車でブルール撤退のしんがりとなって戦った。

ヴィルトゥールは前大戦に従軍した際、ギユンター将軍の指揮する部隊の兵士として国境付近の戦闘に参加した。将軍は卓越した戦況把握と無駄のない指揮でガリアへ勝利をもたらすとともに、ヴィルトゥールをはじめ多くの兵士の命を救った。

将軍は戦後ブルールで静かに余生を過ごしたが、戦時中に妻を亡くしたことで、将軍自身も間もなく病に伏し若くしてこの世を去ったこ

と、そして残されたご子息と養女がいることをヴィルトウールは人伝に知った。

その残された将軍のご子息が、ヴィルトウールをはじめブルールの人々の危機を救った。ヴィルトウールをはじめ、前大戦の戦火を知るブルールの者は皆、故郷を去るあの日、ギュンター将軍の姿をひとりの青年に重ねていた。

いざヴィルトウールがギュンター少尉と言葉交わしてみると、まるで軍人の息子とは思えぬほど物腰の柔らかい青年であった。ギュンター少尉を紹介したアリシアからは、彼と初めて会った時住民が避難を始めている最中に魚のスケッチをしていたのだと笑って聞かされた。

将軍の息子と屈託のない笑顔で話す少女は、ヴィルトウールにとって彼女がまだ幼い頃から知る存在だった。

アリシアは、もとはヴィルトウールの働く孤児院で育ち、戦前は街でただひとりマイスターの資格を持つパン職人のもとで働いていた。アリシアはルイーズがまだ病に伏せる以前から孤児院におり、ルイーズが生前よく面倒を見ていた女の子だった。

ルイーズの死後ヴィルトウールが孤児院で働くようになった頃には、彼女は子供たちの中でも年長になっていたので、よく彼を助け子供たちの面倒をみていた。パン屋で修行を始めてからも、練習でパンを焼いたと言っては孤児院の子供たちに届けてくれたりもした。

開戦の気配が近づいて、アリシアが勤める店も営業を止めると彼女は自警団へと入り、持ち前の面倒見の良さから自警団の分団長の任に就いた。そして、あの日彼女は帰郷していたギュンター少尉と出

会ったのだという。

ルイズが居なくなってから自分をよく支えてくれ、子供のいないヴィルトゥールにとっては、アリシアは他の子供たちと同じく娘のように思う存在であった。

アリシアはブルールからランドグリーズへ避難したのち義勇軍へ志願し、ギュンター少尉と同じ第7小隊に配属となり彼の副官となっている。

ヴィルトゥールは不思議な気分だった。

かつて戦場で命を救ってくれた人物の息子に再び窮地を救われ、今は同じ戦場に立っている。その彼を引き合わせてくれたのは、娘のように思い成長を見守ってきた少女で、今は彼の傍らで自分と同じように戦場に向かう身となっている。

3人が目指す先はそれぞれ同じ故郷であるブルールの街――

ヴィルトゥールは、第7小隊が進んでいるであろう左手の丘の峰を見つめた。彼らの進む先を照らすかのように、雲間から一筋の光が射し込んでいた。

1・追憶（前書き）

■登場人物

（名前／階級／兵科）

>ガリア義勇軍第3中隊第4小隊<

エリック・ヴィルトウル / 少尉 / 小隊長

>ガリア義勇軍第3中隊第7小隊<

ウェルキン・ギンター / 少尉 / 小隊長

アリシア・メルキオット / 軍曹 / 小隊副官

1・追憶

眼前にはなだらかな丘が続き、その丘にはまだ青々とした草花が一面に生え広がっていて、少しずつではあるが故郷ブルールの風景に近づいていることが感じ取れた。他の土地の者が見れば同じような景色の連続でしかないかもしれないが、ブルール出身のヴィルトゥールには故郷の記憶を呼び起こさせる情景に映っていた。

朝に補給拠点を発ち、すでに帝国側の勢力圏内に入っていたが、これまで敵部隊との交戦はなかった。この国境周辺のブルール近郊に至っても帝国軍の姿は見当たらなかった。すなわちこの地域一帯に点在していたであろう敵部隊は皆、ナジアルへ向けて移動しているか、防衛本拠点であるブルールの街に集結していることを意味していた。

帝国軍はヴァーゼル橋を奪い返されて以降、ガリア軍の反攻が激しくなったことと、戦線拡大による補給線の延長、及び兵站面での遅れが重なったため各地で敗走を続けていた。ラグナイト資源が豊富な北部の工業都市ファウゼンを失ったことで、帝国軍の衰えはいよいよ本格的なものとなっていた。

帝国軍が局面を開くべく、総攻撃に備えて主力部隊をナジアルへ集結させつつあるという噂は、多くの兵士の耳にも届いていた。ガリア正規軍をはじめ義勇軍の大半の部隊もナジアルでこれを迎え撃つべく投入されていたのだが、そうした折にあって今回のブルール奪還作戦の命が下った。第3中隊長であるエレノア・バーロット大尉の肝入りで決まり、本隊に第7小隊が指名されたのだ。

そう遠くない帝国との決戦が控える時期に、連戦が続いているはず

の第7小隊を本隊に据えてまで、戦略的重要性の低い辺境の地であるブルールを奪還する意味があるのかと義勇軍内でも疑問の声が上がっていたという。今や義勇軍随一の精鋭となった第7小隊である。正規軍上層部では決戦の先鋒として第7小隊を据えるべきだと発言する者もいた。

軍上層部はもとより、義勇軍内の反対や疑問の声がある中で発令されたこのブルール奪還作戦。バーロット中隊長自ら上層部に進言した背景には、先月のマルベリー海岸で死傷者を出した第7小隊のことが関係していた。戦死したのは、小隊の戦車操縦士であるイサラ・ギンター伍長であった。小隊長のギンター少尉のたった一人の家族で義理の妹である。彼女の死後、士気が沈んでいた第7小隊を慮って、彼らの再起を期すべく本作戦がバーロット中隊長によって起案された。

これまで長く第7小隊の支援任務についていたランツアート少尉指揮下の第1小隊が待機ということで、ヴィルトゥール率いる第4小隊へ支援任務がまわってきたのだった。ヴィルトゥール率いる第4小隊の任務は街の攻略を担う第7小隊の支援である。ブルールへ向けて進軍中である現在は、本隊である第7小隊の右翼側面を警戒、敗残兵や敵哨戒部隊の発見と掃討の任にあたっていた。

これまで第7小隊とは、ヴァーゼル橋奪還戦、バリアス砂漠の拠点制圧戦で同じ作戦に参加したが、直接支援する形で作戦をとみにするのは初めてのことだった。

「おじさんと初めて一緒に戦う作戦目標がブルールだなんて、すごい偶然だね！」

補給拠点を発つ前夜、ヴィルトゥールはアリシアから声を掛けられ

た。いつもの通り天真爛漫に見えるものの、まだ少し仲間を失った
悲しみを引きずっていること、そして故郷を取り戻すという内に秘
めた決意が彼女の表情から透けて見えた。

「ウエルキンはいサラの死を一人で背負いこんでいるみたいで．．
彼の悲しみは私達の悲しみでもあるのに．．」

ヴィルトウールが第7小隊の様子を訊ねると、アリシアの顔から強
がって見せていた笑顔が消え、我慢して抑えていた想いをこぼした
のだった。彼女の瞳が悲しみとともに、どこか戸惑いを湛えている
のをヴィルトウールは敏感に感じていた。

それはこれまでアリシアが見せてきた自分や孤児院の子供たち、義
勇軍の仲間を想う純粋な優しさからくるものとは少し違っているよ
うに思えた。

どこか臆病で、しかし深い愛しさを秘めていて、それが故に彼女の
心を惑わせている――

「今、アリシアが彼にしてあげられることを素直にしてやればいい。
余計な気を遣わんでいいさ。彼だってアリシアや他の隊員が自分を
想っていてくれることは、ちゃんと分かっているはずだから。」

うんと頷いて精一杯の笑みを返したのだが、戸惑いの色は消えてい
なかった。孤児院で自分や子供たちと無邪気に触れ合っている頃の
ような笑顔ではなかった。

戦争が彼女を変えてしまった。戦争さえ無ければ訪れなかった悲し
みによって、彼女や仲間たちの心を歪めてしまっている。

自分もまた、すっかり変わってしまったのだろうか――

2・作戦開始（前書き）

■登場人物

（名前／階級／兵科）

>ガリア義勇軍第3中隊第4小队<
カレル・ユーゴヴィツチ / 曹長 / 小队副官
グリゲラ / 軍曹 / 戦車長
フローラン・ピレス / 伍長 / 通信兵
ボアズ・エシエン / 上等兵 / 偵察兵
ロワーヌ・バリー / 上等兵 / 偵察兵
アシュリー・プティ / 上等兵 / 戦車操縦士

2・作戦開始

「少尉、帝国の連中はもう引き上げたみたいですね。」

ランドグリース近郊ヴァーゼル市出身の22歳、カレル・ユーゴヴィッチ曹長が、のどかな緑の景色に浮かぶ異物を指して訊いていることは明らかだった。

左手前方に破壊され乗り捨てられた帝国軍のハーフトラックが見えた。以前に哨戒中の友軍にやられた斥候のものようだった。

「ブルールの街も放棄してくれていりゃいいんですけどね。」

続け様にユーゴヴィッチお得意のぼやきが口を衝いて出る。

「それはないな。ブルールは中部と北部の中間に位置している。中部方面に残っている部隊がナジアルを目指すなら、このブルールを経由したとしても不思議じゃない。」

副官のぼやきに対して、少し真面目に言葉を返してしまったかなと思っただが、平静を保って言葉を継いだ。

「バリアス砂漠以南の敵部隊がナジアルを目指して移動するなら、できる限り交戦を避けるためにガリア東部の警戒線を迂回しようとするはずだ。」

「中部の帝国軍はクロードンを失って以降とともに補給を受けられず、特に中部の敵部隊は孤立して消耗しきっていると聞いていますしね。」

言葉だけは真面目に返したユーゴヴィッチだったが、その口調はまだ先ほどのぼやきと変わらない。

「そうなる」と遠回りであってもこの国境周辺のブルールあたりまで迂回してナジアルを目指すはずだ。大規模な部隊は既に移動を終えていると聞くが、街の防衛部隊と取り残された中部方面の部隊がいくつが集まればそれなりの規模にはなっているだろう。」

「それじゃあ、敵さんの逃げ足が速いことを祈りたいですね。今頃ナジアルで飯にでもありついてくれてりゃ、俺たちに殺されなくて済むわけだし。」

お喋りなユーゴヴィッチは、とどめとばかりに少尉の背中に小言を浴びせた。

ユーゴヴィッチは第4小隊の副官であり、ヴィルトゥールとはヴァーゼル橋奪還戦からの付き合いになる。戦前はランドグリーズの大学に通っていたらしいが、大学の軍事教練課程では多くの学生がそうするよう士官候補コースを履修せず、試験的に開かれていた特殊戦闘技能教練課程というコースを選択したらしい。

ユーゴヴィッチが以前語っていた話によると、少数部隊による敵勢力下への潜入、及び破壊工作や後方攪乱等の戦闘技術の習得を目的としたものであるという。

ヨーロッパでは小国であるガリアにとって、戦力の規模では敵国との勝負にならない。いかに数や物量で劣る戦力を駆使して敵国を退けるかという考え方が自然と生まれた。そうした軍内の意見や思想が後押ししてのものか、少数ながら特殊任務を遂行できる特別部隊

創設の必要性がガリア軍内の一部から上がったという。

しかし、部隊創設を待たずして開戦となり、ユーゴヴィッチら候補生たちは正規軍、義勇軍問わずバラバラに振り分けられたという。彼は学徒兵であるため義勇軍に入隊、下士官として第4小隊に配属された。

彼は任務中でも事あるごとにヴィルトゥールや他の小隊員に対してばやくのがお決まりで、年かさで饒舌ではない小隊長の代わりに、若く年が近い隊員たちへ他愛の無い話を振りまいて隊の雰囲気を経分和らげていた。

いざ銃弾が飛び交う戦場となると、特殊訓練の賜物なのか22歳の青年とは思えぬ冷静さとの確な判断力を見せ、敵の虚を突く指揮をみせる。

「まあ、腹が減っているなら俺たちがたっぷりとコイツを食べさせてやりませうけどね。」

ユーゴヴィッチは左手でガリアン小銃を撫で回しながらニヤついてみせた。ヴィルトゥールは苦笑しながら、ちらとユーゴヴィッチの方を振り返った。22歳の曹長は一瞬目を合わせて答えたが、その目は前方の丘の峰にじっと向けられていた。他の小隊員も笑みをこぼしながらも、その目はしっかりと周囲に向けられ、警戒を怠る素振りを見せていなかった。

拠点を発つ頃は辺境のブルールが攻略目標と聞いて、決戦に臨む戦力から外されたと嘆く者もいた。一方で、激戦となるであろうナジアルに行かずに済むのなら、これほど楽な任務は無いと半ばピクニツク気分でいる者もいた。

そんな中、いつものお喋りを装いながら気を利かせたユーゴヴィッチが、ブルーが隊長の故郷であることを隊員たちに説いて回っていた。奪還したら隊長の奢りでたっぷり飲み明かそうなどと騒いでいたりもした。

「ヴィルトウル少尉、ギンター少尉から通信です。もう間もなく作戦開始位置に到着することです。」

ユーゴヴィッチの一行後ろを進む南部ガリア出身、25歳の女性兵士フローラン・ピレス伍長が無線通信の内容をヴィルトウルに伝えた。ピレス伍長は小隊付きの通信兵で、戦前はランドグリースの貿易会社に勤務していた。細面で唇が薄く、少すつり目なのできつい印象だが、大きな瞳は結い上げている髪と同じダークブラウンで、長いまつげが女性らしさを引き立てていた。

くだけたものの言い方のユーゴヴィッチとは真逆で、堅苦しく感じる程の生真面目な性格だったが、それ故に小隊の事務仕事も率先してこなし、悪態や文句の一言もなく、よく気が利く女性だった。ユーゴヴィッチや若い男性隊員の卑猥な言葉のやり取りに対して、ピシャリと厳しい言葉を返すこともある。通信兵としてバーロット中隊長や他の小隊との連絡を正確にこなしてくれることから、ヴィルトウルは彼女もまた有能な部下であると認め感謝していた。

「了解だ。貴官の右翼側面を援護しつつ周囲警戒を継続して我々が先行すると伝えてくれ。」

ピレスがヴィルトウルの言葉そのままに無線越しに返答する。よし、とヴィルトウルは小さく頷くとサッと右手を上げて進軍する隊を止めた。

「この先の丘に風車が立っていてそこがブルールの入口だ。街はその風車のある丘を下ったところにあるが、敵が風車小屋に陣地を敷いているかも知れない。あちらは高台にあつてここら一帯を見渡せる。こちらには遮蔽物がないから狙撃手や機関銃のいい的だ。」

ここまで一気に言葉を継いで一呼吸すると、ヴィルトゥールは隊員たちの顔を見回す。ユーゴヴィツチだけは周囲に目を光らせ警戒を止めていない。

ブルールは丘陵地帯の只中にあり、周囲を小高い丘に囲まれている。それら丘の上に風車が立ち並び、季節を問わず穏やかな風が絶えることのない街であった。ヴィルトゥールの言う風車が立つ丘を越えると、街を見下ろすことができ、事実上ブルールの玄関口となっていた。

歴史的に独立自治の意識が強いブルールは、古くから街の自警団が組織され、市街地は勿論のこと牧草地や農場がある郊外にも日常的にパトロールが行われてきた。街を囲む丘に立つ風車は、郊外の自警団の詰所の役割も果たしており、今は帝国軍が哨戒部隊の詰所として利用している可能性もある。

風車は丘の上にあり視界も良く、石造りで出来ているため機関銃や対戦車砲が据えられているとなると、それなりに厄介な防御陣地に変貌する。

「そこで、まず偵察を出して風車小屋周辺の状況を確認したい。バリ、エシエン。」

ほぼ同時に名を呼ばれた二人がヴィルトゥールに顔を向け直した。

色白でブロンドの長髪を後ろで結んだバリー上等兵は、19歳ながら大人びて見える少女だった。

異国の血が混ざっていると分かる褐色の肌をした21歳のエシエン上等兵は、丸く大きな鼻が特徴的な若者で、いつもユーゴヴィッチのボヤきに人懐っこく笑いながら言葉を返す明るい男だった。

「いいか、姿勢を低くして風車が見える位置まで進め。目視して状況を知らせるんだ。他の者は左右に散開して二人の側面を警戒。前方に注意しながら進め。」

「わしはどうりゃいい!？」

小隊員の後方を進んでいた戦車のハッチから黒い髪を短く刈り込んだ初老の男が顔を出していた。小隊最年長のグリゲラはダルクス人で60歳を超える戦車長であり、小隊内ではヴィルトゥールと同じく唯一前大戦にも従軍した経験がある。

当時は戦車の整備技師兼支援兵であつたらしい。ガリアでも例外なく被差別民族であるダルクス人だが、本人はまったく臆することなく豪胆な物言いので分け隔てなく人と接する器の大きい人物だった。

「戦車は前哨戦の安全が確認できるまで後方に待機だ。」

「了解だ。聞いたか？アシュリーちゃん、道が開けたら一気に突っ走るからな！」

グリゲラはハッチの縁をバンと叩きながら自分の身を引いて車内に向かって大声でがなった。すると車輛前方にある操縦席上のハッチがガシャンと勢い良く開き、栗色の髪を振り乱した女性兵士が

飛び上がった。

「もう、うるさい！ただでさえ戦車内は響くんだから大きな声を出さないでよ！」

戦車操縦士であるアシュリー・プティ上等兵が丸い童顔をしかめながらグリゲラを睨む。

「砲弾の音よりデカインじゃないか？ジイさんの声は。」

ユーゴヴィッチが周囲の安全を確認したのか、ガリアン小銃を肩に掲げて振り返りながらアシュリーに言葉を掛ける。

「弾が飛んでこないだけ、マシだと思ってくれ！」

大口で笑うグリゲラの前で、むくれているアシュリーがヘッドホンを装着し直す。ピレスも怪訝そうな表情で深いため息をついていた。

明るく豪快で頼りになるグリゲラであつたが、女性兵士からはさくぶる評判が悪かった。グリゲラは、誰かれ構わず女性を見ると年甲斐もなく絡んでは身体に触れてくるからだ。ダルクス人で品がなく女好きという何とも恐れ知らずな老兵である。

しかし、根は仲間想いで人情に厚いことをヴィルトウールは理解している。グリゲラは小隊の女性兵士たちを孫や娘のように想い接しているものと思っていた。

「バリーとエシエンは位置についたらすぐに状況報告。その後私の指示で丘の上まで移動を開始する。」

やや強い風が丘の上から吹きつけるのを感じ、風が行き過ぎるのを待ってからヴィルトールはやや低く太い声で言った。

「作戦開始だ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9429x/>

戦場のヴァルキュリア ～ブルールの丘から～

2011年10月26日14時58分発行